



篠笛奏者「玲月流」初代 (株)「民の謡」代表取締役

もり た あきら

森田玲氏

皆さんは篠笛をご存知ですか。また篠笛が祭と深い関わりを持っているというのはご存知ですか。今回の京大人の道COMPASSでは、篠笛奏者で祭文化研究もされている森田玲さんにお話を伺いました。
(林檎)

略歴

篠笛奏者。篠笛の演奏・指導・販売・調査研究を行う(株)「民の謡」代表取締役。

昭和51年大阪生まれ。京都大学農学部中退。後、再入学を果たし平成24年に卒業。平成24年度(第67回)文化庁芸術祭大衆芸能部門・新人賞受賞。平成25年1月に玲月流を立ち上げる。平成26年度京都市芸術文化特別奨励者に認定。

日本の祭文化についての研究・執筆活動も行っており、平成27年『日本の祭と神賑』を出版。

現在の活動

——現在どのような活動をなさっているのですか。

「民の謡」の代表取締役として篠笛の演奏を中心に、さまざまな活動を行っています。「民の謡」は岸和田(大阪)と京都の2ヵ所を拠点とした会社で、加えて東京にも篠笛教室があります。

岸和田では岸和田祭をはじめ大阪南部の祭に出る地車のお囃子の笛を、担当する青年団の若者たちに提供しております。京都では、「京師」という銘の篠笛の製作と篠笛教室。そして各地の式典や催し、学校での芸術鑑賞会での演奏、音楽の授業での篠笛の導入を目指す活動などを行っています。その他にも篠笛は祭で使われる楽器なので、祭の調査と研究も行っています。日本の祭というのは、地域コミュニティの中で重要な役割を担っています。未来の日本における祭の役割を常に考えて仕事をしています。

篠笛との出会い

——篠笛を始められたのはいつですか。

20代前半です。小さい頃から笛を吹いていたのか、そういう家柄なのか、とよく聞かれるのですが、そういうわけではないんです。僕の生まれ育った泉州(大阪南部)は笛といえば地車囃子で、子供の頃から笛は好きでしたが、当時はろくに音も鳴らせませんでした。

大学2回生のとき、今でも人生の師匠のような存在である秋道智彌先生(当時・国立民族学博物館教授)の生態人類学の授業に出て、1回目の講義から「この先生は只者ではない!」と思いました。授業の後に喫茶店で先生のお話を聞くようになって、さらに日本のいろいろな場所や海外にも連れて行ってもらうようになりました。

その頃、日本各地の祭にも興味を持ち始めました。若い頃は視野も狭く篠笛は自分の地元周辺にしかないと考えていた

んです。ところが当たり前なのですが日本各地に篠笛があるんですね。

同じ時分に、祭ではなく、舞台上で笛を吹く人もいることを知り、僕も吹いてみたいと思いました。それが直接のきっかけです。でもそのときはまだ篠笛を仕事にしようとは思っていませんでした。

——それにもかかわらず、お仕事とすることになったきっかけは何ですか。

僕は小さい頃から特に地元の地車が出る祭がすごく好きだったんです。でも大学の2、3年生ぐらいになって久々に地元に戻ったときに地車囃子の笛の音が昔のように鳴っておらず、旋律も短くなっていました。馴染みのある囃子の笛と変わっていたんです。囃子方は、音が鳴らないのは自分の吹き方が悪いのだと思っていますが、原因を調べてみると楽器自体に問題があったのです。

これはまずいと思って京大を中退して

楽器屋を始め、それが今でも岸和田の店として残っています。

——なぜ京大を中退されたのですか。

もともとは民俗学や文化人類学に興味がありました。そういった研究をするためには研究するフィールドを決めないといけないですよね。いろいろな地域があるけれど、どうもなかなか愛着がわきませんでした。せっかちなんでダイレクトに地域にも貢献できる形で研究したいと思っていたんですが、論文を書くだけではその地域への恩返しにはならないような気がして。

そんなときに地車の笛の音を聴いて、自分が本当に貢献したいのは岸和田型地車の発祥地である岸和田だ、そう思って大学を中退してしまいました。

最終的にご縁があって卒業するんですけどね。そうじゃないとこの「京大人の道COMPASS」には載れませんか(笑)。

篠笛について

——「玲月流」という流派について教えてください。

篠笛を仕事や趣味で吹く方は増えてきましたが、ピアノやシンセサイザーといった洋楽器と一緒に演奏されたり、外国の曲や流行の曲を演奏されたりする方が多くなっています。

僕は演奏を聴いてくださる方には、漠然と篠笛ってすごいなと感じてほしいというわけではなく、日本の祭や歴史、地域文化のことも一緒に考えてもらえたらと思って篠笛を吹いています。

篠笛の祭とのつながりや日本の歴史の中での意味合いを踏まえて、単なるアート表現だけではなく、日本にとってどう役に立てるのかを考えています。そういった考え方のもと、この理念を明確にするために、また他の奏者との差別化の意味も含めて「玲月流」という流派を立ち上げました。

——篠笛の魅力について教えてください。

篠笛は単なる楽器というよりも祭の場が必要とされる「祭具」なんです。これは例えば家庭音楽でのお箏や三味線、ピアノとは違いますよね。祭は地域の歴史に直結しますから、祭で必要とされること自体大きな魅力だと思います。

ですので篠笛の単体としての魅力をあげることはなかなか難しいですが、強いと言うのであれば、透明で美しく清らかな音色で旋律を奏でられるというところですね。

——改めて、森田さんにとっての篠笛とは何でしょうか。

僕にとっての篠笛は「目的」ではなく「手段」なんです。先ほども申し上げましたように、僕が篠笛を吹き、篠笛の話をすることが、皆さんが自分たちの地域のことや祭の意義などについて考えるきっかけとなれればと思っています。

祭研究について

——日本の祭についての詳しい研究を始められたきっかけを教えてください。

僕にとっては生まれたときから祭といえば地車で、他の祭にはまったく興味がわかず「獅子舞って何？ 太鼓台って？ そんな祭とちゃうし！」などと勘違いをしていました。

「祭」には「神事」と「神賑行事」という2つの領域があります。ヒトの意識がカミ様に向いている場面が神事、カミ様の存在を前提としながらもヒトとヒトとが楽しむ場面が神賑行事です。祭は神事があってはじめて成立します。例えば祇園祭では、神社の本殿で行われるような厳粛な儀式やカミ様が乗る神輿は神事、山鉦巡行は神賑。岸和田の地車も神賑です。人々にとっては一般に神賑の方が面白い。しかしその度が過ぎると神賑が暴走してしまいます。

そうなってくると、とうとう一年中祭

のことしか考えられなくなってしまう。地元には祭がある地域がうらやましいとおっしゃる方も多いのですが、祭一辺倒になってしまうと、日々の営みである産業や文化が育たないおそれが現実にあります。ある日このことに気づき、そこからいろいろな祭を見て勉強しないといけないなと思い始めました。

——どのように研究されているのですか。

フィールドワークと文献研究の組み合わせです。あとは勘でしょうか。それと、祭をやっている人たちとお酒の席は必須です（笑）。

実際に岸和田の地車だけでなく他の祭を研究していくと、昔は眼中にもなかった獅子舞が崇高なものに感じられたり、地車ほど派手ではない太鼓台の方が、地車より神事に近いルーツを持っていることに気づいたり、驚きの発見の連続でした。

——本を出版されたのはどうしてですか。

祭には日本文化、地域文化の歴史が凝縮されていて、さらに地域共同体の核にもなっています。祭にはものすごいポテンシャルがあるのに、ローカル性が高く、祭の概念や基本をシェアするための共通言語がないので、世代を越えた、また地域を越えた会話が成立しにくいというのが現状です。

また、最近では本来の日取りを無視して土日祭を開催したり、神賑が暴走して死亡事故が起きたりと……。

このようなさまざまな問題を議論するために、祭の大前提を共有することができ教科書的な本を作りたいかったです。研究者が出す論文や専門書の内容は祭の現場の皆さんが求めるものとは少し方向性が異なりますし、『日本の祭と神賑』は私の10年分の祭研究のネタが詰まっています。興味があればご覧ください。



▲岸和田の地車のルーツである大坂の地車。岸和田や大坂の祭も、京都の御霊会の影響を受け夏季に盛大な神賑をともなった祭が営まれた。「夏祭車楽囃子」『摂津名所図会』（『日本の祭と神賑』より）

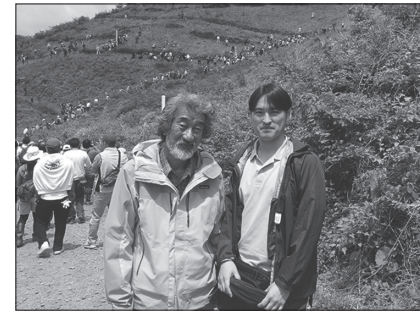


著書紹介
『日本の祭と神賑』（森田玲著・創元社）平成27年出版。祭文化について、図や写真を豊富に交えてわかりやすく紹介されているほか、現在の祭を取り巻く問題についても触れられている。

（理・研 ファーナ）
（ここには（掲載の）夢がちゃんとある；編）



▲再入学時の恩師・柴田昌三先生（京都大学大学院地球環境学・農学研究科教授＜両任＞）（写真提供：森田玲氏）



▲「森は海の恋人・植樹祭」（東北、2013年6月）
畠山重篤氏（京都大学フィールド科学教育センター社会連携教授）（写真提供：森田玲氏）

京大生へ一言

——最後に、森田さんから京大生にメッセージをお願いします。

何人かの京大の先生によると、昔に比べたら今の学生は先生達とゼミや研究室の全体の飲み会で飲むだけで、その後の二次会で先生についていく人がいないそうです。二次会で先生とより深い交流ができるのに、もったいない。

大事なことから結構二次会以降で言ってもらえるものなんです。先生は学生に伝えたいことがあるのに、それを学生側が積極的に聞きに行く機会が少ないように感じます。だから専門分野でも専門外の方でも興味のあることは先生たちをつかまえて聞いてみてください。最前線で研究している人の本当の答えが返ってきます。先生も快く教えてくれるでしょう。

1回生のうちから授業が終わったら話を聞いたり、研究室を訪ねたりしてみてください。その後「お茶でも行こうか」

はみだし
すてーじ

（はみだしたく）ないです。
⇒この投稿が編集部員の目に止まってしまった以上、それは

再び京大へ

——一度は中退された京大に再入学されたのはどうしてですか。

日本人が昔から大切にしてきたカミ様は、産土神、すなわち土地のカミ様です。そして、我々日本人にとってカミとは、神社のカミ様だけではなく、海や山、さまざまな生き物、怨霊、仏様まで、人智を越えた畏れ多いものは全てカミの範疇となります。自然≡カミで、そしてそれを奉る行為が祭なんです。祭では地元の一番贅沢な食べ物でカミ様を奉り、その後、直会といって人々がカミと一緒に食事をします。

森・川・海、動植物とその生態系、食べ物や生命についてなど、自然とヒトとの問題は農学に関わりが深いですね。祭について深く考えるヒントが農学部には詰まっている、今一度授業を受けたいという思いがありました。

そのころ偶然、現役時代にお世話に

なった、竹の専門家でもある柴田昌三先生と篠笛の材でもある竹に関連する会合で再会し再入学のきっかけとなりました。——再入学されたあとはどのような学生生活を送られたのですか。

再入学したのが30代半ばでした。年齢も年齢ですし、試験の答案に適切な答えを書くわけにはいかないので、全ての科目を1回目の京大生時代より本気で勉強しました。また20歳前後の学生たちとも楽しく実習をこなしました。

——大学を卒業してよかったと思うことはありますか。

改めて農学部で勉強して、現場の最前線にいる人の話を聞き質問もできたという経験が、私が物事を行うときのいろいろな助けになっていますし、説得力も増したかなと思います。現在も再入学時の先生や同級生と会う機会が多く、ちゃんと卒業できて本当によかったです。



——ありがとうございました。

（経・1 しゃあ）
（ないです；編）

はみだし
すてーじ

は・み・だ・し・し・た・い
⇒私たちはここに（はみだし欄に）います